

◆夏号に、私の歌集『白き川』への評を小野澤さん、布宮さんに頂き懇切な内容に感謝している。お二人が触れている「志縁」について、布宮さんは、提唱者もろさわようこの思想を深く知るため新聞社を休職し、大学院で論文を書いている河原千春の解説を紹介していた。もろさわの沖縄での五十年に及ぶ実践と著述活動を現地で支え続けてきた元ラジオ沖縄ディレクターみなもとひろみ源啓美との共編で、『沖縄ともろさわようこー女性解放の原点を求めて』（不二出版、四五〇〇円）が刊行された。沖縄諸島をめぐる女性史の視点からの考察と古老からの聞き書き、沖縄戦体験者の証言等。大部だが、項目ごとに細分され読みやすく引き込まれる。是非お勧めしたい。

梅津純子

◆最高気温が32℃くらいに下がると、日中でも、道路沿いの田畑に人が見えたり草刈り機の音が聞こえてきたりする。猛暑の間は人の気配も鳥の気配もなくしんとしたものの、皆、息を潜めているよう。自身、自然に則った息を潜める夏となった。気候への心身の順応には、どのくらいの年数がかかるのだろうか。

大橋千佳子

◆日中は一人でいる時間が長いので、晴れていれば、布団干しとか、洗濯などで明るく費やされる時間が、このところの天候では、ただ読書をするにすぎないしかできません。それもベッドに仰向けになってしているので、体調により影響はありませんね。同居する子がネットフリックスを契約してくれたので、それをみますが、日中はみません。コンテンツに何か韓国ドラマが多いよう。今は史劇（時代劇）でなく、現代物を観ています。おおよそ若者らのドラマ。操作というものがおおよそ必要ないので、視聴が長くなりがち、これも体調にはよくありません。そんなことで歩いていますが、途中で、ベンチにやすむようになりました。それでベンチ仲間というような人たちもできました。話をする相手がいるというのは、よいことですね。

小野澤繁雄

◆猛暑、極暑、酷暑。きつとニュアンスの違いがあるのだと思うが、いずれにしても厳しい暑さには変わりがない。確か八月八日が立秋だったと思うが、残暑などとは言えない暑さである。驚いたことにせつかく実を付けた南瓜が身割れをしてしまった。こんなことは初めてである。「酷暑耐へ深夜ラジオのジャズを聴く」

神村ふじを

◆なんとも危険な夏でした。「今までにない」「猛烈な」などの形容詞句が気象用語に加わり、いろいろな警報にはそこそこ対処しました。地球上にも洪水、火災など相次ぎ、想定外でした。そ

れに、コロナ禍の不安も残り、「自分の身は自分で守る」との箴言の必然性を噛みしめています。秋の味覚で、笑顔の日常に戻していきましょう。

河村郁子

◆この夏の大事件は猫の空（くう）が三夜も家に帰って来なかったことだ。大抵の猫は夕方、腹をすかして帰宅するもの。時々現れる怖い黒虎の猫に追いかけて、ゲリラ豪雨の中、足を踏みはずし川に流されたのでは、とか、家の前に広がる遊休地の一隅に倒れているのでは、とか考えて闇雲に駆け回った。夜も眠れず食べ物は喉を通らず（ビールは飲めたけど）で、生きた心地がしなかった。七月十四日の朝、ふとトラクター庫の板敷きの二階を見上げると、空が居るではないか。前足をちよつと引きずっている。黒虎に苛められてケガをして、少し治るまでそこで休んでいたんだね。布宮さんが大江町に通じる農道で拾った生後三カ月ほどの猫を私がもらったのだった。あれから七年、家族の一員として穏やかに暮らしてきた。突然居なくなれるのってこんなに辛いとは想像もしていなかった。香川の知人が出している結社誌に二十句投句することにしていった。このことが格好の題材になったのは言うまでもない。

さて、今回の句について必要最低限の説明をさせていただきたい。いつも散歩している農免道路、雪が解けたので行ってみると、周囲が間伐されていた。看板には「緑環境税により整備しました」とある。育ちの悪いスギだけでなく気に入っている広葉樹も伐られていた。何のためなのか、

白鷹町役場に訊いてみた。鳥獣被害対策で、クマやイノシシなどが隠れやすい木を、道路の両側三十メートルにわたって伐り、山との間に緩衝地帯を作った、とのこと。効果のほどはどうか。最近民家近くでのクマとの遭遇をよく耳にするが。

新野祐子